# 紅陵に命燃ゆ

文・皿木喜久　題字・藤渡辰信

## 米国とのパイプで解体逃れる

### その11　大学の危機

### ケネディ就任式に招待

話はいきなり戦後、それも昭和36（１９６１）年にまで飛ぶ。

この年の1月20日、ワシントンで第35代米国大統領、ジョン・F・ケネディの就任式が行われた。43歳の若さでさっそうと登場したケネディに、世界中が沸いた。

日本でも全国に「○○のケネディ」を名乗る政治家が現れるほどだった。だが、日米安保条約改定をめぐる「安保騒動」からまだ半年余り、就任式に招待された日本人はたったの3人だった。

1人は駐米大使の朝海浩一郎、後の2人は当時青山学院大学教授の国際政治学者、細野軍治とその娘、治子だった。細野が人もうらやむような就任式に呼ばれた理由は、約9年前にさかのぼる。

昭和26年11月、まだほとんど無名の下院議員だったケネディは、世界一周の旅の途中、日本に立ち寄った。主な目的は先の大戦中に戦った日本海軍の「宿敵」を探すことだった。

海軍中尉だったケネディは昭和18年8月、魚雷艇を指揮して中部ソロモンのコロンバンガラ島西方を航行していた。遭遇して戦った日本の駆逐艦に上から乗られるように体当たりされ、魚雷艇をまっ二つにへし折られた。

ケネディは部下2人を失ったが残りを率いて近くの島まで泳ぎ渡り助かった。英雄的行動だったとして、後に勲章をもらっている。その駆逐艦の艦長との「再会」を願っていたのだ。

連絡を受けたのはケネディと同じボストン郊外の出身で、東京のGHQ（連合国軍最高司令部）外交部のガーデナー1等書記官だった。ガーデナーは親しい細野を誘い、ケネディに築地の料理屋でごちそうした。

細野はその駆逐艦が「天霧」で艦長は当時少佐の花見弘平だったことをつきとめる。ケネディは帰った後だったが、以来花見とケネディは文通を始め、大統領選では「美談」として披露された。細野とケネディもまた、これが縁で親交を深めていったのだ。

廃校を免れ「紅陵大学」と衣替えしたときの表札＝拓殖大学創立100周年記念『右手に文化の炬をかかげ』より

### 軍国主義の先兵と誤解

就任式に招かれたときには、池田勇人首相の親書を携え、直接ケネディに渡した。池田が後に訪米したとき、日米首脳会談が成功裏に実現したのも細野とケネディとの親しい仲があったためといわれている。

大正時代にロサンゼルスの知人を頼って米国に留学した細野は、南カリフォルニア大学を卒業、コロンビア大学の修士課程を修了するなど、若いころの20年近くを米国で過ごした。この逸話でもわかるように米国に幅広い人脈を持っていた。

これが戦後、拓殖大学が廃校になりそうな運命に直面したとき、これを回避する一助となる役割を担うことになる。

終戦とともに日本に乗り込み、占領政策にあたったマッカーサーのGHQは、日本の「軍国主義復活」を極端にまで恐れ、教育や文化の面からも「軍事色」を一掃しようとした。

ほとんどは日本文化や教育に対する無理解や誤解によるものだった。例えば、日本が誇る歌舞伎の上演がほとんど禁止された。「忠臣蔵」のように仇討ちを奨励し、「封建的忠誠」を連想させるといった理由からだった。

さらに戦前から国民の一番の娯楽だったチャンバラ映画も「刀を振り回すのは野蛮」という無茶苦茶な理由で禁止となった。こちらは昭和26年のサンフランシスコ講和条約締結まで続いている。

さらに教育面では、男女共学の導入とともに、旧制高校が廃止された。寮生たちが黒マントに高下駄で寮歌を歌いながら騒ぐストームがGHQには得体が知れず、軍国主義につながりかねないものと映ったらしい。それだけが廃止の理由ではないにしても、乱暴な話である。いまだに廃止を惜しむ声は強い。

米国に太いパイプを持っていた細野軍治

そして大学では拓殖大学がやり玉にあがった。

台湾協会学校時代から、新しく編入された領土・地域の開発のため働く人材、世界に飛躍する人材を育てるというのが大学の理念だった。これがGHQには、日本の軍国主義の先兵役を担ったというふうに受けとられたのだ。

### GHQへ働きかけ実る

終戦当時の学長は陸相や外相をつとめた宇垣一成だったが、戦後まもなく辞任、元台湾総督府民政長官で朝日新聞副社長などを務めた下村宏（海南）が後を継いだが、公職追放（後日解除）となる。

同大学百年・小史「世界に天駆けた夢と群像」によれば、当時の高垣寅次郎学監や青山楚一教授が文部省の大学局長に呼び出され、GHQが拓殖大学などの解散を内定していると告げられる。

青山はGHQの担当課長に直談判し「拓殖大学は純然とした私学で、国家機関から補助金をもらったこともなく、軍部の手先や侵略主義の要員を養成する大学ではない」と主張する。結果的には取り消しの結果が文部省から伝えられたという。

この間、米国人に知人が多く、学内からも人望があった社会学の斎藤和一教授ら多くの拓殖人が廃校阻止に向けて努力したという。細野もその一人だった。

細野は米国から帰国した昭和14年から、大日本航空の国際課長のかたわら拓殖大学の講師をつとめていた。そして廃校問題が起きると、GHQ教育部長のM・オーアらとの人脈を生かし、存続のための工作をしたといわれる。

存続は決まったものの、敗戦で植民地がなくなった以上、植民地を開拓するという意味の「拓殖」の名はふさわしくないとの意見も強かった。そこでさまざまな候補の中から「紅陵」が選ばれ、紅陵大学と改めた。昭和20年11月のことで、27年10月、拓殖大学と復元するまでこの校名が使われる。

細野はその後、新制の紅陵大学の教授となるが、大学存続のための隠密理の工作については生涯、口を開かなかったという。

（毎週土曜日掲載）

第35代大統領就任の宣誓をするジョン・F・ケネディ（右）。就任式に招かれた日本人は細野軍治親子ら3人だった＝1961年1月20日、ワシントン（UPI＝共同）

**細野軍治（ほその・ぐんじ）**　明治28（１８９５）年、現在の東京都町田市生まれ。大正4年、早稲田実業を卒業し米国留学、10年、南カリフォルニア大学卒業、11年コロンビア大学修士課程修了。

その後西欧各地の大学に遊学するなどし昭和9年帰国、14年、拓殖大学講師、24年、新制紅陵大学教授、青山学院大教授もつとめた。岳父が同志社大総長でハワイ大学教授もつとめた原田助で、原田を通じての人脈も広かった。昭和44年4月死去。享年73。

**昭和20～30年代の学長・総長**

本文にもある通り、終戦時の拓殖大学学長は宇垣一成だった。陸相や朝鮮総督などをつとめ、昭和12年にはいったん組閣の大命を受けた「大物」軍人だったが、終戦直後に学長を辞任した。後を受けた第６代の下村海南も著名なマスコミ人だったが、公職追放となり（後日解除）２カ月で辞任。校名変更後の苦難の時代には金融学者の高垣寅次郎が第７代学長（途中から総長）をつとめた。

日本が独立を回復した昭和27年４月、高垣が辞任すると、時事新報論説委員から教授に転じた鈴木憲久が総長事務取扱、28年に第８代総長に。同年４月には満鉄副総裁から商工相や鉄道相、日本商工会議所会頭などを歴任したやはり「大物」の政治家で財界人の八田嘉明が第９代となる。

さらに30年には、憲法改正論など戦前、戦後の政治に大きな影響を与えた矢部貞治が第10代総長に就任、９年余りつとめ、外務省出身で衆院議員２期の後ブラジル大使となった安東義良に引き継いだ。